

<研究ノート>幕末ロシア留学生に関する一資料

著者	宮永 孝
出版者	法政大学社会学部学会
雑誌名	社会労働研究
巻	43
号	1・2
ページ	85-96
発行年	1996-11
URL	http://hdl.handle.net/10114/6089

幕末ロシア留学生に関する一資料

宮 永 孝

慶応元年七月二十六日（一八六五・九・一五）の未明、幕府派遣のロシア留学生六名（山内作左衛門⁽³⁰⁾、緒方城次郎⁽²²⁾、市川文吉⁽¹⁹⁾、大築彦五郎⁽¹⁰⁾、田中次郎⁽¹⁵⁾、小沢清次郎⁽¹⁵⁾）を乗せたロシア海軍の蒸気軍艦「バガティリ」号（*Bagatilla*）勇士⁽¹⁾の意、一七〇〇トン）は箱館を出帆し、一路ロシアへと向った。

同艦が、帰国の途次、長崎・香港・シンガポール・バタビア・サンモンズタウン（南アフリカ）・ケープタウン・セントヘレナを経て、南イングランドのプリマスに入港したのは、翌慶応二年一月二七日（一八六六・三・一三）の早朝のことである。

ロシア留学生の一行は、「バガティリ」号がつぎの寄港地、フランスのシェルブールに寄るまでの約二週間、港町プリマスにおいて、ヨーロッパでの最初の日々をすごしている。かれらは交替で上陸すると、町中の銭湯（「蒸し風呂」か）に入ったり、散策や買物をしたり、芝居をみたり、レストランに入り食事をしたりして、半年以上におよぶ長い航海の苦勞をいやしたのである。

プリマス *Plymouth*（図版Ⅰ）は、イギリスの代表的な海港のひとつである。イングランド南西部、デボン州の港

町である。ロンドンの西南西三六四キロに位置している。今日の人口は約二六万（一九八〇年）である。プリマスは中世以来、漁業・商業・海港として栄え、一四世紀に入ると要塞化され、海軍基地をもうけ、重要な役割を果すようになった。この港町は、イギリス史上名高い、数多の艦船の出帆を目撃している。

一五七七年フランシス・ドレーク（一五四〇？～一九六）は、この港から世界一周の航海に出だし、一五八八年スペインの無敵艦隊を向え撃つためにハウアド・オブ・エフィンガム卿は、ここから出帆し、さらに一六二〇年新大陸への最初の移民船「メーフラワー」号⁽²⁾も、当地をさいごの寄港地としてアメリカに向った。そして一七世紀以来、半島の西岸部（デボンポート）にドックや海軍基地がつくられ、プリマスはますます枢要の地位を占めるに至った。

一九一四年デボンポート、ストンハウス、プリマスの三都市が合併され、その全地域をプリマスと総称されることになった。プリマスは、ポーツマス港と同じように海軍工廠と軍港の所在地としてきわめて重要な地位にあったから、第二次大戦中、延べ五九回⁽³⁾もドイツ空軍による空襲をうけ、甚大な被害をこうむった。戦乱によりプリマスの町並みは一変した。今、往時を想いおこさせる建物は数少ないが、町の各所に古い家や静かな通りや小路があって、昔の面影がしのばれる。

現在のプリマスは、他のイギリスの港町の多くがそうであるように、海岸保養地、ヨットハーバーとして知られ、産業としては食品・造船・衣料などが盛んなようだ。この町は、温暖な気候と美しい湾岸風景にめぐまれ、落ちついた静かなたたずまいを見せている。港湾一帯を遊歩道が取りまいていて、時折そこを散策する人の姿がちらほらみられる。ここを支配しているのは静けさであり、カモメの鳴き声である。

百数十年前のプリマスも、おそらく今日と変らぬ静かな港町であったことだろう。ロシア留学生らは、朝もやの中にみえる砲台（「ロイヤル砦」）やヴィクトリア朝風の町並みとそこから立ちのぼる人煙を見、そぞろに陸上の生活を

想像したことだろう。

一月二七日(三・一三)、一行は、昼食に生の食用肉を供され、それにしたづつみし、さらにオレンジを食べ、汚れ物を洗濯屋に出した。二八日の午後、一行はセントヘレナ以来六三日ぶりで上陸し、大地の感触をあじわい、銭湯に入り、つもるあかを洗いおとした。市川と緒方・大築のみは、同日市内のホテルで一泊した。三〇日(三・一六)、山内・小沢・田中らは上陸すると、「ロイヤル劇場」(図版Ⅱ)で芝居を観、それよりとなりのホテル(「ロイヤル・ホテル」?)で一泊した。水洗トイレの精妙さにおどろく。二月二日(三・一八)、市川と大築は、再び上陸した。三日、山内は午後の上陸し、下着・手袋・世界地図などを求めた。四日(三・二〇)、大築と田中は上陸した。翌五日の午後、大築は再び上陸した。「バガティリ」号では、石炭の搬入がはじまる。六日(三・二二)、夕食後、市川・緒方・大築らは上陸すると、銭湯に行く。同夜、三人はあらしのため市内のホテルで一泊した。八日(三・二四)、山内は防寒服とズボンを求めた。

二月九日(三・二五)の未明、「バガティリ」号は幕生六名をのせてプリマスを出港、対岸フランスのシェルブルを目ざし、同日の午後六時前にシェルブル(図版Ⅲ)に入港した。翌一〇日(三・二六)、一行六名は、案内役のロシア士官とともに上陸すると、パリに向かい、さらにベルギー、ドイツのベルリンを経て、慶応二年二月一六日(四・一)の午後、雪のペテルスブルクに到着した。……

幕末のロシア留学生に関する海外資料は、これまでほとんど発見されず、ましてや紹介されることもなく、今日に至っている。が、筆者は先年の夏、イギリス滞在中に若干二次資料を入手することができたので、それを紹介することにする。それは英紙『ザ・ランドン・アンド・チャイナ・エクスプレス』『The London and China Express』に三回にわたって掲載された新聞記事である。

同紙がはじめて幕生らの記事を掲げたのは、一八六六年三月一七日のことで、ペテルスブルクの『セーヴェルナヤ・ボーチタ』すなわち『ノーザン・ポスト』紙の記事を転載したものである。つぎにその大意を掲げる。原文（英文）は「資料」として本稿のさいごに掲げた。

「外国情報」ロシア、ドイツその他―本紙特派員より ハンブルク発 三月七日

サンクト・ペテルスブルクの『ノーザン・ポスト』紙に、つぎのような記事がみられる。「昨年九月、ロシア太平洋艦隊の指令官イェンドグロウ海軍少将の招きにより、大君^{グイジ}によって選択された日本の青年七名⁽⁴⁾は、陸海軍の諸術の各分野を学ぶために、故国に向かうロシア海軍のコルヴェット艦「バガティリ」号に乗船した。かれらは皆、大君^{グイジ}の宮廷における有力者の子弟又はその縁戚であり、バガティリ号において学習を開始した。これらの若い紳士⁽⁵⁾のうち四名は、江戸の高等教育機関⁽⁶⁾において、これまで英語・フランス語・ドイツ語・オランダ語といった近代語の教師であった。」

ついで同年五月一〇日、在ハンブルク特派員は、ペテルスブルクの『北のミツパチ』紙⁽⁷⁾に載っていた幕生に関する記事を見だし、それを本紙『ザ・ランドン・アンド・チャイナ・エクスプレス』に送り、さらに同紙はそれを転載した。

「外国情報」ロシア、ドイツその他―本紙特派員より ハンブルク発 五月七日

ロシアに派遣された若い日本人六名は、サンクト・ペテルスブルクに到着し、外務省のアジア局に出頭した。『北のミツパチ』紙は、つぎのように伝えている。「周知のことであるが、日本政府がこれらの若者を派遣したねらいは、科学的な意図があったという

ことである。一行中でいちばん年長者は、わずか一八歳である。最年少者の二人は、わずか一二歳である。⁽⁸⁾ かれらはヨーロッパの教育をうけることになっている。かれらが知識を身につけて帰国したとき、これまでの日本がまったく経験したこともないような数多の変革や発明が可能になる。

また同じ目的をもって、イギリス・フランス・オランダに派遣された青年らもいる。⁽⁹⁾ 目下、サンクト・ペテルスブルクにいる日本人は、わが国のコルヴェット艦「バガティリ」号で運ばれて来た。同艦は日本人をシエルブルに上陸させた。そこから一行は、汽車でフランス・ドイツ経由で当地にやって来た。かれらはアジア局に出頭したとき、ロシア滞在中は同局の保護下に置かれるのであるが、洋服を着ていた。断髪姿であったが、その容貌にはアジア系の特徴が著しく、すぐ生粋の日本人とわかるほどであった。⁽¹⁰⁾

バカティリ号は、一昨日(五月五日)キールに到着し、バルチック海を経てクロンシュタットに着いた。⁽¹¹⁾

六月一日付のつぎの記事も、在ハンブルク特派員の通信によるものだが、ニュース源はおそらくロシア紙であろう。

「外国情報」——ロシア・ドイツその他——本紙特派員より ハンブルク発 六月七日

ロシアの蒸気コルヴェット艦「バガティリ」号は、約五カ年間故国を留守にしたのち、この間同艦はもっぱらシナや日本の海域で仕務にっていたのだが、極東から無事クロンシュタットに帰港した。帰途、⁽¹²⁾ プレストに寄港し、日本の青年らを上陸させた。⁽¹³⁾ かれらはプレストより陸路サンクト・ペテルスブルクに向った。

翌日、艦はクロンシュタットの提督兼皇帝の海軍武官でもあるノボシルスキー海軍大将、参謀部上席の海軍少将タウベ男爵らの査閲をうけた。

日本駐劄オランダ総領事グラーフ・ファン・ボルスブロック氏が開始した、日本とデンマークとの通商航海条約をめぐる予備交渉についての情報、コペンハーゲンに届いている。

以上のごとく三つの記事の中には、明らかに間違いと思われるものも部分的に見られるが、概ね正しいものである。幕生らが国家目的としてのロシアに派遣されたこと。乗った艦がヨーロッパ到着後、クロンシュタットへ直行せず、プリマスに寄ったのち、シェルブルール港に寄港したこと。幕生らは同地で下船し、陸路ロシアへ向ったこと。和服でなく洋服で役所（外務省アジア局）に出頭したこと。シェルブルールを出港した「バカティリ」号がフランスの軍港ブレスト、ついでドイツのキール港に寄港したのち、クロンシュタットに向ったこと。帰港後、同艦が軍幹部の査閲を受けたことなどが明らかになる。

これらの記事は必ずしも第一級資料とはいえないが、幕生のヨーロッパ到着後の動向や従来不明であった露艦「バカティリ」号のその後の航跡を知るうえで貴重である。

The London and China Express 紙に掲載されたロシア留學生の記事

[續前 一]

Foreign Intelligence.

RUSSIA, GERMANY, &c.

(FROM OUR OWN CORRESPONDENT.)

HAMBURG, March 7.

The St. Petersburg Northern Post contains the following :—“In September last seven young Japanese, selected by the Tycoon on the invitation of the Commander of the Russian squadron in the Pacific, Rear-Admiral Jendogurov, were shipped on board H.I.M.’s corvette *Bogatyr* for passage to Russia, for the purpose of studying different branches of the military and naval professions. They are all sons or near relations of influential persons at the Court of the Tycoon, and have already commenced their studies on board the corvette. Four of these young gentlemen were hitherto teachers of modern languages—German, English, French, and Dutch—at the High School at Yedo.”

RUSSIA, GERMANY, &c.
(FROM OUR OWN CORRESPONDENT.)

HAMBURG, May 7 th.

The six young Japanese sent to Russia have arrived at St. Petersburg and been presented at the Asiatic Department to the Minister for Foreign Affairs. The *Northern Bee* says: "It is well known that the Government of Japan, in sending these young men to Russia, had in view a scientific object ; the eldest of them is only eighteen years of age, and the two youngest are only twelve. They are to receive a European education, and thus acquire knowledge that will enable them on their return home to introduce many improvements and inventions hitherto totally unknown in Japan. Other young men have been sent to France, England, and Holland for the same purpose. The Japanese now at St. Petersburg were brought over in the Russian corvette *Bogatyr*, which landed them at Cherbourg, whence they came on by the railway through France and Germany. When they presented themselves at the Asiatic Department, under the protection of which they will remain during their stay in Russia, they wore European dresses and had had their hair cut, notwithstanding which their features bear such a striking Asiatic type as to cause them to be immediately recognised as genuine natives of Nippon." The *Bogatyr* arrived the day before yesterday (5th May) at Kiel, on her way up the Baltic to Cronstadt.

RUSSIA, GERMANY, &c.
(FROM OUR OWN CORRESPONDENT.)

HAMBURG, June 7.

The Russian steam corvette *Bogatyr*, after an absence of nearly five years, during which she was exclusively employed on the China and Japan stations, has safely arrived at Cronstadt from the Far East, touching at Brest to land the young Japanese who proceeded from thence to St. Petersburg by land. On the following day she was officially inspected by the Port Admiral, Admiral Novosilsky, Naval Aide-de-Camp of the Emperor, and the chief of the naval staff, Rear-Admiral Baron Taube.

Advices have been received at Copenhagen that preliminary negotiations have been opened by Myn heer Graeff van Polsbroek, the Dutch Consul General in Japan, for a treaty of commerce and navigation between the latter country and Denmark.

注

(1) 拙書『幕末おろしや留学生』(筑摩ライブラリー)や拙稿「幕末ロシア留学生市川文吉に関する一史料」(『社会労働研究』第三九巻第四号)において、このロシア艦のことを「ボガテール」号と表記したが、「バガティリ」と書き表すほうがロシア音に近い。

(2) A Pictorial and Descriptive Guide to Plymouth, Stonehouse, Devonport, and South-West Devon. Ward Lock and Co., London, New York and Melbourne (発行年不明) の一〇頁。

(3) 東浦義雄『カメラ英國紀行』(篠崎書林、昭和三年九月)、六二頁。

(4) 当初、七名選抜されたが、志賀浦太郎が脱落したので六名となった。従って六名が正しい。

(5) 四名は誰を指すのか不明。

(6) 蕃書調所(開成所)のこと。

(7) 教師というよりは、稽古人(学生)。

(8) 「いちばん年長者」は、山内作左衛門である。従ってこの箇所は正しくない。

(9) 「最年少者の二人」とは、田中次郎と小沢清次郎であるが、ここではじっさいの年齢と合わない。

(10) 英仏蘭に派遣された幕生のこと。

(11) 西フィンランド湾のコトリン島に位置。

(12) フランス北西部、フィニステール県西部の港町(軍港)。

(13) シェルブルールに上陸させたが正しい。市川文吉の父兼恭の自筆日記(「浮天斎日記」)に、「(慶応二年)二月九日セルボルグ着」とある。

夕佛

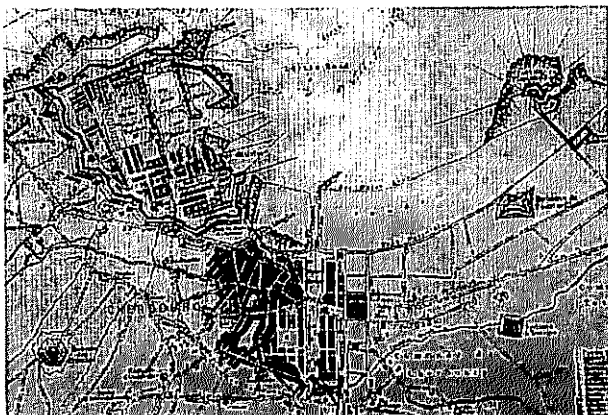


19世紀のブリマス港と町並み
〔図版Ⅰ〕



19世紀のブリマス市内
正面左端の建物は、幕生らが宿泊したホテル。正面中央の建物は、幕生らが観劇した所。

〔図版Ⅱ〕



1860年代のシェルプールの地図

〔図版Ⅲ〕